

# ジョルジュ・バタイユにおける社会学とその使用方法に関する考察

大阪大学 田口了麻

## 1. 目的および背景

本報告は、ジョルジュ・バタイユ (Georges Bataille 1897-1962) が社会学を自身の諸活動においてどのように用いたのか明らかにすることを目的としている。これまでバタイユについての研究がなされてきた領野は、そのほとんどが文学ないし哲学を基盤としたものであり、社会学の視点からの探究はほぼ皆無に等しいと言って差し支えない。

しかし、バタイユが大戦前の一時期とはいえ社会学研究会 (Collège de Sociologie) というグループを組織しており、会の名称に「社会学」の語を入れていた点は注目に値する。また、ジャン＝ポール・サルトル (Sartre 1947) が指摘したようにバタイユの諸々の活動が全て彼の「企て (projet)」だったとするならば、彼が自身の思索に社会学をどのような形であれ援用したこともまた、彼の「企て」の一つであると言える。これら諸点を鑑みる限り、バタイユについて社会学の視点から考察を行うことは、バタイユ研究、ひいては社会学史の観点から見ても決して無駄ではないと考えられる。

よって本報告では、バタイユが社会学に関して言及したテキスト群、ならびに、それに付随する各種関連資料の検討を通じて、バタイユの指向する社会学とはいかなるものだったのか、および、それは何を目的に用いられたものだったのかについて一考を試み、バタイユ研究への一助としたい。

## 2. 方法

今回用いるテキスト群およびその関連資料は、以下の三つに大別される。すなわち、①1937年から1939年まで存在していた社会学研究会に関連するテキストおよび講演記録 (ほとんどがドゥニ・オリエ編 (Hollier ed. 1979) に収録されている)、②戦後『クリティック (Critique)』誌に掲載されたバタイユの手による社会学に関する小論、③ミシェル・シュリヤ (Surya 1987) によるバタイユの伝記、である。なお、①については関連資料として、同時期にバタイユが率いていたアセファル (Acéphale) という名の結社兼雑誌と、その関連資料についても併せて参照したい。

## 3. 結果

③を参照する限り、バタイユが社会学に最初に触れたのは、アルフレッド・メトローを通じてマルセル・モースの講義に出席するようになった1925年頃だと思われる。モースの研究がエミール・デュルケムの延長線上にあったことを考慮すれば、バタイユの社会学の基礎にはデュルケムの社会学があったと考えて差し支えない。また、②からはバタイユが社会学、特にデュルケムの社会学が全体的事象としての社会のありようを解明するための一科学的方法であり、かつ、聖／俗の二項対立を基点としていると捉えていることが見受けられる。この見方は、後年の社会学研究会においてバタイユが対ファシズム戦略を展開する際に援用され、事実①ではファシズムに対抗するために社会構造の研究が必要であること、個人の総和である社会は個人を超越した聖性を有しているとする考えから、研究活動対象を「聖社会学 (sociologie sacrée)」と定めることが言及されている。

しかし、確かにバタイユはファシズムに対し警鐘を鳴らしていたものの、彼にはサルトル (Sartre 1947) が指摘するように、全体性への欲望を捨てきれない側面がある。実際、雑誌の『アセファル』では首長の存在しない共同性の探究を通じて、全体性を回復するための思索がいくつかなされた形跡があるが、結社のアセファル自体がその性質上、神秘主義に過ぎる部分があったため、賛同を得るのが難しかった。そのため、より広い形で「聖なるもの」としての社会を研究するための組織として社会学研究会を設立し、デュルケムの社会学を組織の指針の一つに援用したと考えられる。

## 4. 結論

以上の点から、バタイユにとっての社会学とは、デュルケムの社会学を出発点としたものであり、聖／俗の二項対立を対ファシズム対策における理論的基盤とし、かつ、自身の理想とする社会の全体性の崇高さを弁明するための方法の一つとして用いていたと結論付けられる。